お彼岸法話

岩手県善慶寺住職　三浦恵伸　師

日蓮聖人の教団創始の理念に立ち返ろう

大曼荼羅ご本尊中心　一丸となって活動展開を

一、常波羅蜜・常住不滅の生命の在る処
二、楽波羅蜜・無苦安楽の生活の在る処
三、我波羅蜜・我意自在の活動の在る処
四、浄波羅蜜・清浄平安の楽土の在る処

これを仏教の四徳波羅蜜多と言います。壽量ご本仏（妙法蓮華経）の理想が成就されている処（彼岸）であり、人の出自とすることを示唆しています。

難しいので、分かりやすく言い換えましょう。

一、死にたくない、いつまでも元気でいたい。
二、苦労したくない、楽に生きていきたい。
三、他人に束縛されたくない、自主自由でありたい。
四、争いの無い綺麗な処に住みたい。

皆さんも同じことを考えているのではないでしょうか。

死にたくないし、楽をして生きていきたい。自由でありたいし、ケンカするのはいやだ。そう思うのは当たり前であり、その基本的な欲求の実現のために、努力を続けていくのが人間なのです。

その理想（彼岸）を、こちらに引き写すのが、人類の文化活動に他なりません。

人類の叡智と努力で医薬・衛生等が向上し、平均寿命が延びました。また、さまざまな電化製品は暮らしに安楽をもたらし、現代人は文化生活を享受しています。

身近なところでは携帯電話がありません。その普及によって電話ボックスが消えました。ひと昔前なら出先で電話をするのに公衆電話を探したものですが、今はその場で電話ができます。その電話が普及する前の伝達手段は、電報や郵便でした。それ以前は飛脚のお世話になっていたのです。そう考えますと便利になったものです。

しかし、高度な近代科学力は、地球の容量を超えることもあります。利便性や効率を優先させることが、自分さえよければいいというエゴに変じ、巡りめぐって自分達に仇なす場合があります。今、公害や地球温暖化など環境問題が人類の課題となっています。

そして、人と人との間に衝突は絶えません。国家・民族・宗教間の闘争が終焉する兆しもありません。我・浄の両波羅蜜は、はたして実現するのでしょうか？

この問題解決の鍵は、我波羅蜜の完全な引き写しにあります。高度な物質文明も人の心次第です。我とは本仏の顕れなり」と自覚すれば、仏としての振る舞いになりますから、その国は浄土となるのが道理です。

現在、安倍政権は「美しい国日本」の実現を標榜し、憲法改正・教育改革等、国民に意見を求めています。本当に美しい国ができるのなら、これは浄土相の顕現であり、まさに望む処です。

その実現のためのシステムは、吾が宗門に七百五十年前から用意されていたのです。

日蓮聖人が、『立正安国論』を鎌倉幕府に建白し、公場対決の実現を迫られたのは、社会のあらゆる分野を妙法蓮華経に直結し、一大精神文化を構築するためでした。

念仏は無間地獄の業因なり。法華経は成仏得道の直路なり」（念仏無間地獄鈔）

法華経の精神が政治によって確立され、社会のシステムが整えば、この日本国は自然に浄土相を顕現してきます。

法華経を以て国土を祈らば、上一人より下万民に至るまで悉く悦び栄え給ふべき鎮護国家の大白法なり」（法華初心成仏鈔）

法華一乗の霊化生活をこの国に普及し、世界に国家経営の見本を示して、人類の平安を実現するのです。

日蓮宗の仕事を電力会社などの仕事にたとえてみましょう。

物質文化の一翼を担う電気関連会社は、自然界から電気を取り出し（発電）、電流を起こして、照明・動力源として社会を照らし・物体を動かして、常・楽波羅蜜の実現に寄与しています。

精神文化の担い手である日蓮宗は、自然界に密在するお題目の霊気から霊流を起こします。霊光で人心・社会を照らし、霊力で仏事を作す人、つまり菩薩を社会に生み出します。私たちは、四徳波羅蜜多の実現を目指す宗教団体なのです。

地球存亡の危機かもしれない今、私たちは、日蓮聖人の教団創始の理念に立ち返り、法華弘通の旗印たる大曼荼羅ご本尊（浄土顕現の設計図）を中心に、一丸となって活動を展開しなくてはなりません。

諸仏菩薩は常楽我浄の風にそよめき、娯楽快楽し給ふぞや。我等も其の数に列なりて、遊戯し楽しむべき事はや近づけり」（松野殿御書）

を早期に実現したいものです。それが祖師への報恩でもあるのです。

電化生活の利便性は否定できません。加えるに、お題目を信仰する人間の存在（霊化生活の視点）が是非とも必要であることを確認し合う秋が訪れています。